

□ 次の——のカタカナを漢字に改めなさい。

- ① ギヤツキヨウを乗り越えよう。
- ② 取引先と大事なショウダンをする。
- ③ チョメイな作家の作品を読む。
- ④ ユメが実現しそうだ。
- ⑤ ゲキジョウに芝居を観に行く。
- ⑥ エキシヤのベンチで休む。
- ⑦ トウジにかぼちゃを食べる。

□ 次の□には共通の言葉が入ります。それぞれ漢字一字で答えなさい。

- ⑧ 手を□げて発言する。
選□がもうすぐ始まる。
一□両得だ。
寒さで水道□がこおりつく。
- ⑨ 手練手□のかぎりをつくす。
□楽器が得意だ。
□縁にいれる。
□に汗する。
- ⑩ 高□な商品。

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

亡き父の四十九日の供養の日に、由里と母は、父の大好物であつたきりたんぼの鍋を食べることになった。

「由里ちゃんもー、早く食べないと」

母にせかされ、席についた。さすがに暑くて汗が吹き出る。こんな季節に鍋をするなんて初めてだ。私も母もクーラーは苦手だから、よほどの猛暑日でない限りつけていない。

まずは、スープを一口。けれど、あれ？ 気のせいかと思つて、もう一口。すかさず、母が私の顔をのぞき込む。

「どう？」

① 思わず、目を宙に泳がせてしまった。

「美味しくない？」

不安そうな少女の瞳で、母が私の顔を見つめている。どう答えたら母を傷つけないで済むか、必死に考えたものの、うまい言葉は見つからなかった。母はすぐに、自分の器に口をつけた。

② 「ああ、ダメだ。すっかり味がわからなくなっちゃった」

母は、哀しそうに目を伏せた。こんな表現しかできない自分が情けないけれど、それは、雑巾を絞ったような味だった。強烈な味はしなくても、舌を通過した数秒後、苦いような臭いような心底嫌な味がじわじわと顔全体に広がってくる。

「お醤油があんまり効いていないみたい」

なんとかその場を取り繕おうと、とっさに適当なことを口走った。

「そうよね、お醤油、入れ忘れたのかも。今、入れるから器に入っている分も、お鍋の中に戻してくれる？」

母は立ち上がって、冷蔵庫の扉を開けた。それから、鍋全体に醤油を回しかけた。菜箸でひと混ぜし、もう一度煮えばなを器によそう。ふうふうと息を吹きつけて冷ましてから、おそろおそろのスープを含んだ。けれど、雑巾の味はますます強烈になっていた。「お母さん、きつと私達、二人とも味覚がおかしくなったのかも。だって、きりたんぽがこんな味するって、今まで一度もなかったし、おかしいじゃない。お父さんがいなくなったショックが、そういうところに出てるんじゃないかな。いいから、気にしないで食べようよ」

母があまりにもしよげているので、可哀想になった。本当に、私達の舌がどうかしてしまったのだ。それ以外に、原因は考えられない。

「そうね、お父さんが好きだったきりたんぽだもん。」

X よ、

X

母は無理にそう言つて、器の中に入っていたものを次々と口の中に押し込んだ。私も、肉や野菜を無理やり口に詰め込み咀嚼する。

X ね

言つてはみるものの、二人とも明らかに箸を動かす手がだんだんゆっくりになっていく。

「由里ちゃん、もう無理して食べなくていい。おなか壊すといけないから」

母の表情をまっすぐに見ることができなかった。もうその声色だけで、がつくりとうなだれていることが伝わってくる。

③「今までずっとお父さんのために料理作って生きてきたから、もう作れなくなっちゃったんだね」

④「そう言う母は、今にも幼子のように泣きだしそうだった。」

その時、あつ、と母が小さく叫んだ。何かと様子をうかがっていると、母はおもむろに立ち上がり、再び冷蔵庫の扉を開ける。また、さっきと同じ醤油の入った瓶を取り出した。そして無表情でキャップを持ち上げると、そのまま瓶に口をつけて飲み始めた。

「お母さん、やめて！」

戦争の時、醤油を飲んで徴兵を逃れたという人の話を思い出した。すると今度は、母がゲラゲラ笑い始めたのだ。

「ねえ、お母さん、どうしたの？ ねえ」

正直、母の気がおかしくなってしまったかと思った。けれど母はひとしきり笑ったあと、

「由里ちゃんもこれ、ちょっと飲んでごらんよ」

そう言つて、醤油の入った瓶を手渡す。

「うわあ、何これ？」

醤油の味と香りとはほど遠い、雑巾絞り汁を濃縮させた、まさに不味さの原液だった。瓶を両手に握りしめたまま、母はしんみりとした表情を浮かべ、ゆっくりと椅子に座る。何かを思い出したらしい。

「これさ、お父さんが入院したっていうんで、会社の部下だった方が、お見舞いに持ってきてくれた薬草茶なの。免疫力が上がるすごいお茶だつて言われて、家で煎じてお父さんに持って行ったのよ。でもお父さんったら、一口飲むなり、こんな不味い物口に入れられるか、って不機嫌になつて。だけど貴重なお茶だし、まだ残っていた分は、この瓶に入れておいたのね。でもすっかりそのこと忘れてて。醤油と間違えて、使っちゃった。これじゃ、おいしくなるわけないわよね」

⑥「そうだったんだ」

言つたそばから、笑いと切なさが半々ずつ、じわりじわりと胸の奥から湧き上がった。

⑦「こんな不味いの、誰だつて無理だよ」

「そうね、お父さん、俺の気持ちかわかなくて、それで天国から遠隔操作して仕掛けたのかな」

「それもあるし、もしかしたらお母さんのこと笑わせたくて、悪戯したのかも」

母も、私と同じように泣きながら笑っている。

「もう、せつかく暑い中きりたんぽ作ったのに」

「でも、もしもこれ、お父さんに食べさせてたら」

⑧「即刻死刑だったね。ほんとほんと。殺されてたよ」

「やつぱりお父さん、私とお母さんだけでおいしいきりたんぽするのが許せなかったんじゃない」

どなべ
土鍋の中の苦くて不味いきりたんぼは、煮え切って、ぐつたりしている。

「これじゃあ、きりたんぼじゃなくて、煮物だね。おしまい」

言いながら母は、せっかく作ったきりたんぼを、ざーっと豪快に流しに捨てた。

「今から、レストランでも行ってみようか？ お母さん、ご馳走するから」

けれど、時計を見るともう九時近い。空腹も、ピークを越えてしまっている。

「いいいいいよ、もうそんなにおなかも空いていないから」

「じゃあ、これでおだし作って、ちやちやと食べようか」

母が取り出したのは、小袋に入ったインスタントの混合だしだった。

⑧「お母さん、そんなの使ってるの？」

母は必ず、かつおぶしや昆布、しいたけや煮干しなどから丁寧にダシをとっていたのだ。

「だって、お父さんいなくなっちゃったし。一人分の料理なんて、作る気にはなれないわよ。ほら」

引き出しを開けて自慢げに見せたのは、たくさんの袋入り麺だ。

「こういうのもね、結構おいしいの」

母が手早く作ってくれたのは、インスタントのだしに私が丸めたきりたんぼを入れ、残っていた具材を適当に入れて味をつけたお吸い物のような一品だった。さつき鶏ガラスープ用の鶏肉から取っておいた余り肉も入っている。

「おいしい」

インスタントのだしを使っても、そこにはちゃんと母の味が行きわたっていた。

「うん、さつきの鍋より、こっちの方が断然おいしいじゃない。最初から無理しないで、これにすればよかったね」

湯気の向こうで、母がほほえむ。ようやく少し、普段通りの母の笑顔に近づいた。やっぱり父は、こういう表情の母の顔が見たかったのかもしれない。

季節はずれのきりたんぼは、思いのほか苦くて不味かった。

この味を忘れることは、決してないだろう。

*、原文を一部改めました。

(小川糸『あつあつを召し上げ』より)

注1 きりたんぼ…秋田地方の郷土料理。

注2 煮えばな…調理したて。

問1 — ①は、ここでは「私」のどのような様子を表していますか。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 不味さに驚いている様子。

イ 味覚に自信が持てない様子。

ウ 父の思い出にひたる様子。

エ 答えに困っている様子。

オ 母に同情している様子。

問2 — ②のように母がなってしまった原因は何だと「私」は考えていますか。文中から十五字でぬき出しなさい。

問3 ☐ Xに入る共通の語として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア おいしい イ かなしい ウ まずい
エ うれしい オ おかしい

問4 — ③について、「私」が「母の表情をまっすぐに見ることができなかった」理由としてふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 無理して不味いきりたんぼを食べていることを母に指摘され、申し訳なく思ったから。
イ お腹を壊してでも食べなければ母に悪いと思いながら、苦しさを隠す自信がなかったから。
ウ きりたんぼ鍋ではなく自分たちの味覚が変なのだという言葉が通用しないとわかり、いたたまれなかったから。
エ 母の作ったきりたんぼが不味いということを、否定することができなかったから。
オ あまりにもしょげている母の姿を見て、なんとなくかわいそうになったから。

問5 — ④について、ここでの母の心情として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 夫の四十九日くらいは、幼い子どものように大声でわめいて娘を困らせても、罰はあたらないだろうと開き直る気持ち。
イ 夫が死んでから料理を全く作らず、料理のしかたを忘れてしまった自分のことを、母として最低だと悔しく思う気持ち。
ウ 夫がいなくなり、料理を作る相手がなくなったことで、自分の料理の能力までもなくなったことを悲しく思う気持ち。
エ 料理が下手になっていたにもかかわらず、得意げに娘にきりたんぼをふるまおうとしたことを恥ずかしく思う気持ち。
オ 夫のためにしか生きていけない自分の生き方に気づき、結婚して夫のために料理を作ってきたことを後悔する気持ち。

問6 — ⑤について、母がこのような行動をとった理由を四十五字以内で答えなさい。

問7 — ⑥についての説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 入院中の父の愉快なエピソードを思い起こしての笑いと、醤油を飲んで母が死ぬところだったことを思い出している切なさ。
イ 心配された母の異様な行動の謎が解けたことに安心しての笑いと、死んでしまった父がひどい人間だったことを知っての切なさ。
ウ 厳しかった父が同僚に痛い目に合わされていたことを知っての笑いと、死ぬ前に不味いものを食べさせられた父を思っている切なさ。

- エ 落ち込んだり笑ったりと感情が目まぐるしく変わる母の様子を見ての笑いと、もの忘れのひどくなった母の実情を知っている切なさ。
オ きりたんぼ鍋の不味さの原因が母のささいな間違いであったことがわかっての笑いと、生前の父のことを思い起こしている切なさ。

問8 — ⑦とは父のどんな気持ちですか。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 天国でも不味いお茶を与えられる悲しい気持ち。
イ 不味いお茶を飲まれたときの不愉快な気持ち。
ウ 死んで離れてしまっても妻と娘を愛する気持ち。
エ 不味い薬草茶を家からなくしたいという気持ち。
オ つらい思いをしても病を治そうという気持ち。

問9 — ⑧について、ここから読み取れる「私」の気持ちを六十字以内で答えなさい。

④ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、文中では「日本列島」に生きる人々の歴史を描いているので、「日本人」ではなく「日本列島人」と記している場合もあります。

二一世紀になって、わたしたちは日本人の歴史においてこれまでも、これからもないだろうと思われる、ある特別な状態を経験しました。それはなんでしょうか？　じつは、二〇一〇年の日本人の人口は一億二六三八万人（総務省がウェブで発表している人口統計にもとづきます）で、日本人の歴史上、最大でした。わたしたちは、そのような「極」②の時代に生きているのです。

この現在から、まず五〇年ほど前、一九六〇年代にさかのぼってみましょう。五〇年後のいまとくらべて、当時はほとんど存在していなかったのに、現在では一般的になったものはなんでしょうか？

現在ではありふれているけれども、五〇年前はまったく存在しなかったものは、たくさんあります。そのなかで、わたしたちの生活に重要なものをいくつか考えてみましょう。まずインターネット③です。わずか三〇年ほど前から世界中にひろがっていったインターネットは、巨大なネットワークを地球上にはりめぐらせて、現在では人類文明にとって必須なものとなりました。パソコンも携帯電話もタブレットも、インターネットにつながってこそ真価を発揮します。ウェブもメールもツイッターも、インターネットがあつてこそ成り立っています。日本列島の住民であるわたしたちも、その恩恵を深く受けています。江戸東京時代の四〇〇年④における人類文明最大の変化は、インターネットの登場だったかもしれないと、わたしは考えています。インターネット発祥の地は米国であり、しかも最初は軍事目的で開発されたものです。しかし最初軍事目的だったものには、ダイナマイトやコンピュータなどたくさんあります。日本では、村井純や故石田晴久らの尽力により、一九八四年からJUNET (Japan University Network) がはじまりました。現在では、日本列島中にインターネットの幹線がはりめぐらされており、それらは世界中のネットワークとながつて、巨大な情報が毎秒いきかっています。人類文明は、いまや本当の意味でひとつにつながったのです。

日本で大きく発展し、現在は韓国や中国など東アジア、東南アジアにもひろまりつつあるシステムに、コンビニエンスストア（コンビニ）があります。五〇年前には、日本には存在していませんでした。コンビニなしの生活が考えられないという人も多いので

はないでしょうか。食品や一般雑貨だけでなく、宅配の受付や公共料金の支払いもでき、銀行のATM（現金自動預支機）も完備されているコンビニは、日本人の多くにとって、生活の基盤となりつつある。

一九六四年に開業した新幹線は、二〇一四年で誕生から五〇年になりました。日本列島における鉄道の歴史は一〇〇年以上ありますが、東海道新幹線の登場は、当時の高度経済成長時代を象徴しました。時速二〇〇km（現在では東北新幹線で最大時速三二〇km）という高スピードだけでなく、安定性や安全性が高いことも新幹線の大きな特徴でしょう。ある意味で、現代日本文化の特性を象徴しているといえるかもしれません。現在では東海道、山陽、東北、上越、山形、秋田、九州、北陸と、新幹線網は日本列島全体を覆う勢いです。またコンビニほどには日本列島の外に進出していませんが、すでに台湾には日本の新幹線技術を導入した高速鉄道が導入されています。

このほかにも、過去五〇年のあいだに登場して、現在ではわたしたち日本列島の住民にとって事実上必須になったものや当然の状況になったことが多数あります。

こんどは、五〇年前はまだ存在していたのに、現在では消えてしまった物事を考えてみましょう。地球上からまったく消えさつたものは少ないでしょう。五〇年という短い時間にどこからも痕跡がなくなる文化要素は、ほとんどありません。方言独特の単語が多数消えてしまったとよく言われますが、どこかでまだおばあさんやおじいさんが使っているかもしれません。蒸気機関車も、わたしは中学生のころまで何度も乗ったことがありますが、現在では主要路線からは消えました。しかし日本のあちこちで、短い距離ながら黒い煙をはいて観光客を楽しませています。

⑤ このように、日本列島全体でみれば、五〇年前存在していた物事がまったく消えてしまうことはないかもしれません。とはいえ、歴史とは何かを考えると、個人史の重ね合わせという側面があります。この場合、五〇年ほど前には自分にとってあたりまえだった物事が消えてしまったという経験は、年配の皆さんがそれぞれ持っておられるでしょう。わたしの場合、たんぼのあぜ道に沿った小川であり、小川にすんでいたメダカやザリガニなどの生物です。こどもだったからそれらの生きものに親しんでいたという側面は否定できませんが、メダカが現在絶滅危惧種⑥となっています。日本列島のあちこちで、メダカは実際にいちじるしく減少し

ています。

田園風景の特徴のひとつだった茅葺き屋根の家も、五〇年ほど前にはまだちらほら見かけたものですが、現在では特別な保護をされている家以外ではほとんど消えてしまいました。茅葺き屋根の家では、いろりを使っていた部屋には天井がなく、屋根の骨組みまで高い空間が広がっていました。最近建てられる家に吹き抜け構造が取り入れられることが多くなりましたが、ある意味では、茅葺き屋根の家がもっていた巨大な吹き抜け構造の時代に、もどりつつあるのかもしれない。

(斎藤成也『日本列島人の歴史』より)

* 原文を一部改めました。

注 JUNET……日本のインターネットの最初のかたちである学術情報ネットワーク。

問1 この文章の流れのうえから前半と後半の二段落に分けるとすると、後半の最初はどこになりますか。その初めの五字を答えなさい。

問2 ①と似た意味の四字熟語はどれですか。記号で答えなさい。

ア 日進月歩 イ 一朝一夕 ウ 前代未聞

エ 空前絶後 オ 前人未踏

問3 ②とはどのような時代ですか。二十字以内で答えなさい。

問4 ③について、開発の目的が「インターネット」と同じであったものを文中から二つぬき出しなさい。

問5 ④とありますが、筆者が「インターネットの登場」を「人類文明最大の変化」だと考える理由を説明した次の文の[]を四十字以内でうめなさい。

わずか三十年前に登場したインターネットによって、

問6 ⑤について、「個人史の重ね合わせ」と筆者がいつているのはなぜですか。次の中から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 歴史には自分の身近な個人的なことも含まれるから。

イ 歴史はあくまでも個人のものにすぎないから。

ウ 個人の歴史を積み上げたところに社会全体の歴史が成立するから。

エ 歴史とはあたりまえのことが消えて行くことに他ならないから。

オ 歴史とは個人の重なった集団でつくられるから。

問7 ⑥の意味に最も近いものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア すでにいらなくなってしまうもの。

イ いらなくなるおそれがあるもの。

ウ いらなくなると確定しているもの。

エ いらなくなると一般の人に予想されているもの。

オ いらなくなることはないが、これ以上、数は増えないもの。

問8 ― ⑦とは、どういうことですか。次の中から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

- ア 昔のように、いろりを使うような生活に、現代人があこがれを持っているということ。
- イ 吹き抜け構造のような天井の高い、ゆったりした造りの家が現在増えてきたということ。
- ウ 昔とは建築の手順は違^{ちが}っているものの、茅葺き屋根が復活しているということ。
- エ なんでも便利なものばかり求めているのではなく、昔の不便なものの方がありがたいということ。
- オ いろりを囲むような家族そろっての一家だんらんの大切さに現代人は気づいたということ。

問9 次の各文について、本文の内容と合っているものに○を、合っていないものには×をつけなさい。

- ア パソコンや携帯電話はインターネットとは関係なくとも、われわれにとって有効なものである。
- イ 半世紀以上前から、われわれ日本人にとってコンビニなしの生活など考えられない。
- ウ 新幹線は日本の高度経済成長を象徴している。
- エ 五十年もたつと、方言独特の単語はすべて失われてしまっている。
- オ 五十年もたつと、かつて自分にとつてあたりまえだったものがなくなることがある。

このページに設問はありません

